

対人不安と関係性スキーマの関連：語彙判断課題を用いて¹

Examinations of Relationships between Social Anxiety and the Relational Schema: Using Lexical Decision Task

西 村 洋 一*

Abstract

This research investigated the relationship between social anxiety and relational schemata. It predicted that social anxiety is related to the manner in which relationships between the self and others are built since social anxiety is one of the emotions that originate from relationships with others. Three experiments on lexical decision tasks were conducted, in which the prime stimuli were context stimuli, including success- or failure-related words, and the target stimuli were acceptance- and rejection-related words. Experiment 1 demonstrated that acceptance target words were contingent on context stimuli for the socially anxious group. In experiment 2, the same contingent relationships as those found in the case of the socially anxious group in experiment 1 were observed in anxiety-provoking social situations. However, the effects of social anxiety were not observed. At the same time, the rejection target words did not show any such relationship. Experiment 3 examined the relationships between social anxiety and relational schema in perspective of dual-process model. Results of these experiments did not support any predictions. Finally, methodological problems were discussed.

キーワード：対人不安／関係性スキーマ／語彙判断課題／他者からの受容・拒絶

問題

関係性スキーマとは

関係性スキーマ (relational schema) は, Baldwin (1992) によりまとめられた概念であり, 個人における他者との関係性や対人経験の重要性を指摘してきた数々のアプローチを統合したものである。数々のアプローチとは, 例えば, 対人認知, 自己認知, 状況認知といった認知的アプローチ, 象徴的相互作用論, あるいは対象関係論といったものが含まれる。これらのアプローチを踏まえて関係性スキーマは, 「典型的な対人的状況とそれらの状況で経験される思考, 感情についての知識の連合ネットワーク」(Baldwin, 1992) として概念化がなされている。

自己に関する知識としての自己スキーマという概念については, Markus (1977) 以来多くの研究がなされてきた。これらの研究では, 自己スキーマを対人的要因とは別個に機能する認知的概念として捉えられてきたきらいがある。関係性スキーマの観点では, 自己スキーマ, そして他者スキーマはそれぞれが孤立した存在ではなく, 特定の関係性における文脈と関連する宣言的知識, 手続き的知識と連合ネットワーク内で結合しているという仮定がなされている。ここで, 自己スキーマと他者スキーマを結びつける知識は, 典型的な相互作用パターンを示す対人スクリプトである。この対人スクリプトは, 過去において繰り返された他者(特に重要他者)との類似した相互作用により獲得された期待を含んでいる。Baldwin と共同研究者たちは, この対人スクリプトを「if…then」という結果期待の集合という観点から枠組みを作

* NISHIMURA, Youichi
北陸学院大学 人間総合学部 社会福祉学科
社会心理学・人間関係論

ることが有用であるとしている。例えば自尊感情について考えてみる。他者との関わりの中で、日々成功や失敗を体験するわけであるが、それに対する他者からの反応も得られる。そのような経験を繰り返す中で、ある出来事が他者との関係でどのような結果が引き起こすのかという期待が形成される。それは「もし成功したならば、受容してくれる」「もし失敗したら、拒絶される」という随伴的関係の形を取ると想定される。そして、自尊感情に対しては、成功や失敗といった体験が直接影響を与えると言うよりは、経験から個人の中で形成された対人的期待により自尊感情に影響をおよぼすと考えられている。このように、「if…then」という形の中に他者との関係性が表れており、そのような関係性スキーマが個人に影響を与えると考えているわけである。

この関係性スキーマからのアプローチにより、Baldwin とその共同研究者たちは自尊感情(例えば, Baldwin, 1994; Baldwin, Carrell, & Lopez, 1990; Baldwin & Holmes, 1987), アタッチメント(例えば, Baldwin, Fehr, Keedian, Seidel, & Thomson, 1993; Baldwin, Keelan, Fehr, Enns, & Koh-Rangarajoo, 1996) などについて主に検討を行ってきた。これらの自尊感情やアタッチメントを関係性スキーマの枠組みで捉えた研究から、活性化された関係性スキーマが自己や社会的評価の知覚に影響を与えるだけでなく、対人関係における行動的、動機的な側面にまで影響を及ぼすという結果が得られている。そのため、関係性スキーマという観点は、人間の社会的認知や社会的行動を理解するうえで有用な視点を提供していると考えられる。

対人不安と関係性スキーマの関係

本研究では、このような関係性スキーマと対人不安との関係について検討を行う。対人不安は、「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」(Schlenker & Leary, 1982) として定義されている。さらに、近年対人不安という感情は、他者との関係における関係の切り下げ (devaluation) という関係性評価に対する早期警告システムとして概念化されている (Leary & Buckley, 2000)。つまり、他者との関係のあり様が対人不安喚起に強く関わるわけ

あり、自己と他者との関係のあり様についての知識である関係性スキーマという観点より対人不安について検討を行うことは、対人不安のより一層の理解に有用な知見を提供すると思われる。

対人不安と関係性スキーマの関係については、Baldwin & Fergusson (2001) において論考がなされ、Baldwin & Main (2001) において実験的検討がなされている。対人不安を多くの場面で感じやすい対人不安傾向の高い人にとって、優位性の高い関係性スキーマは、ネガティブな自己(例えば、無能、無価値)とネガティブな他者(例えば、批判的、拒絶的)というそれぞれのスキーマを、ネガティブな対人スクリプトにより結び付けられ構成されているということが予測される (Baldwin & Fergusson, 2001)。Baldwin & Main (2001) の実験的検討では、中間的な音と受容的、あるいは拒絶的な関係性スキーマを古典的条件づけの手続きにより条件づけを行い、その後で初対面の他者と会話を行う際に条件づけた音の呈示を行った。その結果、拒絶的なスキーマと関連づけられた音が呈示された実験参加者は受容的なスキーマと関連する音を呈示された人よりも、主観的状态や行動面にネガティブな影響を示したのである(特に公的自己意識の高い人において)。

これらの結果より、対人不安を関係性スキーマの観点から検討することの有効性が示されているが、まだ研究は少なく、より詳細に検討する必要があると思われる。特に、対人不安を感じる人において活性化している関係性スキーマの内容の側面については、実証的な検討がなされておらず、対人不安の喚起における関係性スキーマの役割といった機能面に話しを進めていくためには、検討の必要性があるであろう。例えば、Baldwin & Sinclair (1996) において、自尊感情の低い人は、他者からの受容、拒絶といった結果について、成功、失敗という文脈との随伴性が高いことを示している。そこで、本研究では、Baldwin & Sinclair (1996) において、自尊感情の高低による関係性スキーマの内容の違いの検討がなされたように、関係性スキーマの内容について、対人不安傾向の高い人と低い人の違い(実験1)、対人不安を喚起しやすい場面とそうでない場面での違い(実験2)の検討を行う。特に実験2では、対人不安が

ある特定の対人場面での主観的不安状態であることから、対人不安を喚起しやすい状況を設定し、その状況において活性化した関係性スキーマの内容を検討するという試みを行う。さらに、関係性スキーマの性質をより詳細に検討するため、自動処理過程、統制処理過程という2つの情報処理過程の観点(dual-process model)を取り入れ、多様な観点から考察を行う(実験3)。

本研究では関係性スキーマを検討するために、語彙判断課題を用いる。語彙判断課題は呈示された熟語や文字列が、正しいものであるか否かを判断してもらう課題であるが、その判断する刺激の前に呈示された刺激が知識構造内で結合の強いものであれば、判断のための反応時間は速くなり、そうでなければ反応時間は遅くなると考えられている。本研究ではBaldwin & Sinclair (1996)と同様に、まず対人的期待における文脈を示す熟語(以下、文脈語)として、成功や失敗といった熟語を呈示し、受容や拒絶といった対人的な結果を示す熟語(以下、ターゲット語)を呈示し、判断してもらう。その際、受容や拒絶といった対人的な結果が成功、失敗といった文脈と対人的期待において結合が強い(随伴的な関係が構築されている)ならば、成功の文脈語が呈示された場合に受容に関連する熟語の判断の時間が速くなり、失敗の文脈語が呈示された場合に拒絶に関連する熟語の判断の時間が速くなることが予測される。

実験1

Baldwin & Main (2001)の研究においては、対人不安について関係性スキーマの観点からの検討がなされた。この研究では、対人不安は拒絶の関係性スキーマへの接近可能性が高まっているときにより高い対人的緊張などを経験するという仮定のもとに検討を行っているが、特性としての対人不安傾向の高い人と低い人の慢性的に接近可能な関係性スキーマの差異については検討が行われていない。そこで、まず、実験1において対人不安傾向の高い人と低い人の間の関係性スキーマの内容の差異について検討を行う。

Baldwin & Sinclair (1996)の自尊感情と関係性スキーマの関係についての検討の結果、Baldwin & Main (2001)の実験結果、およびBaldwin &

Fergusson (2001)の理論的予測を参考に以下のような仮説を立て検討を行う。対人不安傾向の高い人において、文脈(成功・失敗)と受容、拒絶という対人的な結果との間に随伴的な関係があるであろう。また、特に対人的な拒絶という結果が文脈との間に強い随伴的な関係が見られることが予測される。

方法

実験参加者

大学生、大学院生男女39名が実験に参加した。そのうち6名については、採用基準に満たなかったため、分析には使用しなかった。本研究においては、各刺激条件でエラーとなった試行が存在しない条件が少なくとも2つあり、全体で平均して2つのエラー試行より少ないという基準を用いた。これはBaldwin & Sinclair (1996)の用いたものと同様である。その結果、分析に用いたのは33名のデータであった(男性:18名,女性:15名)。その33名について相互作用不安尺度(岡林・生和, 1991)の得点より、中央値($Me=21.0$)を算出した。それより高い得点を取った者を、高対人不安傾向群(以下、HSA群: $M=25.1$, $SD=3.0$, $n=16$)、中央値以下の得点を取った者については、低対人不安傾向群(以下、LSA群: $M=15.6$, $SD=3.5$, $n=17$)とした。

実験デザイン

対人不安傾向(HSA vs. LSA) × 文脈語(成功 vs. 失敗) × ターゲット語(受容 vs. 拒絶)の3要因の実験デザインであった。対人不安傾向は被験者間要因、文脈語とターゲット語は被験者内要因である。

材料および装置

刺激 語彙判断課題には、96個の漢字2字熟語を使用した。これらのうち、48個の熟語は文脈を示すものであり、シソーラスを参考に「成功」に関連する熟語(例として、「達成」、「成就」、「結実」など)、「失敗」に関連する熟語(例として、「失態」、「落第」、「挫折」など)をそれぞれ16個ずつ用意した。中立である熟語については、五島・太田(2001)によって調査された熟語の感情価についての結果を参考に感情価が中程度であると判断された熟語を16個選択した(例として、「転換」

「示唆」,「持参」など)。残りの48個の熟語は、語彙判断のターゲットとなる刺激として使用したが、「受容」に関連する熟語(例として、「承認」,「尊敬」,「賞賛」など)、「拒絶」に関連する熟語(例として、「拒否」,「排除」,「疎外」など)をシソーラスを参考にそれぞれ24個ずつ用意した。また中立の熟語の漢字一字を置き換え、実在しない熟語(以降、非熟語と呼ぶ)を48語作成した(非熟語以外の刺激は全てAppendixに示してある)。ターゲットとなる熟語48語と実在しない熟語48語の計96語に対して、48の文脈を示す熟語を組み合わせて、参加者に呈示した。それゆえ文脈を示す熟語は2回ずつ呈示され、全部で実験参加者一人あたり96試行を行った。なお、この熟語対は、実験参加者ごとにランダムに呈示された。

装置 実験にはパーソナルコンピュータ(Dell Dimension4100)を使用した。また刺激呈示の制御、反応の採取、及び反応時間の測定はDMDXを使用した。

材料 相互作用不安尺度 Leary(1983)によって作成された尺度を岡林・生和(1991)が日本語に翻訳し、修正したものである。翻訳された修正版対人不安感尺度の下位尺度である相互作用不安尺度は、多くの研究で対人不安傾向の測定に用いられている。岡林・生和(1991)において、 α 係数は十分な値を示しており、因子的妥当性があることも示されている。全7項目を5段階尺度で評定してもらい、それらを合計することで対人不安傾向得点を算出した。

手続き

漢字の認知に関する実験という名目で実験は行われた。教示はディスプレイに呈示された。実験参加者の課題は、ターゲットとなる文字列が正しい熟語であるかどうかを判断し、それに応じてキーボードのキーをできるだけ速く、かつ正確に押すことであった。それぞれの試行で、まず凝視点が1000ms呈示され、そのあとで文脈語が700ms呈示された。それから300msの休止の後、判断がなされる熟語が2000ms呈示され、反応時間が計測された²。操作に慣れるために本試行とは別の刺激を用いた練習試行を行い、その後で本試行を開始した。語彙判断課題の終了後、相互作用不安尺度を完成してもらい、実験を終了した。

結果

予備分析

まず、語彙判断課題についての予備分析を行った。始めに語彙判断におけるエラー率を算出したが、熟語試行48試行において、エラー率は6.9%であり、非熟語試行48試行におけるエラー率は2.5%であった。これらのエラー試行は、分析から除外した。

非熟語への反応時間について、文脈語(成功, 中立, 失敗), および対人不安傾向(HSA群, LSA群)の 3×2 の2要因の分散分析を行った。その結果、有意な効果はいずれも見られなかった。

さらに、中立の文脈刺激を呈示したときの受容語、拒絶語への反応時間について検討を行った。ターゲット語(受容語, 拒絶語), および対人不安傾向(HSA群, LSA群)の 2×2 の2要因の分散分析を行ったところ、有意な効果はいずれも見られなかった。

主分析

データの分析は誤反応を除き、正答のみを使用した。各群、条件ごとの平均反応時間をFigure1に示した。この反応時間について、対人不安傾向(HSA, LSA), 文脈語(成功, 失敗), ターゲット語(受容語, 拒絶語)を要因とした $2 \times 2 \times 2$ の3要因の分散分析を行った。対人不安傾向、ターゲット語の主効果は得られなかったが、文脈語の主効果が有意であった($F(1, 31)=20.0, p<.001$)。成功の文脈における反応の方が、失敗の文脈における反応よりも有意に短いことが示された。対人不安傾向、文脈語、ターゲット語それぞれの2要因の交互作用はいずれも有意とならなかったが、3要因の交互作用が有意であった($F(1, 31)=7.2, p<.05$)。そこで単純効果の検定を行ったところ、拒絶の熟語について対人不安傾向と文脈の交互作用が有意であった($F(1, 62)=4.4, p<.05$)。単純・単純主効果をみてみると、LSA群において、失敗の文脈の方が成功の文脈における拒絶語への反応時間よりも長かった($F(1, 62)=10.7, p<.01$)。また、HSA群において文脈とターゲット語の交互作用が有意であった($F(1, 31)=6.0, p<.05$)。HSA群において、受容語に対して、失敗の文脈の方が、成功の文脈における反応時間よりも長いことが示された($F(1, 62)=14.8, p<.001$)。

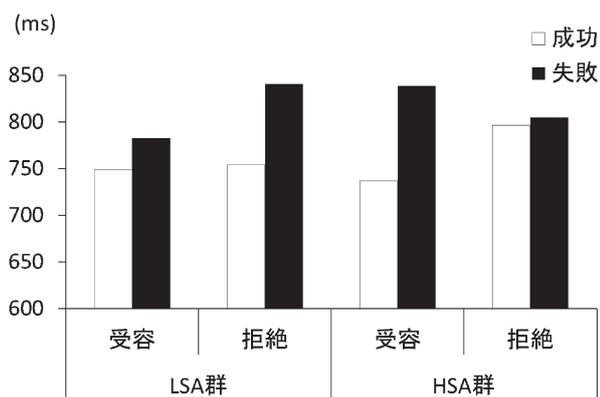


Figure 1 各群・条件の平均反応時間 (実験 1)

考察

実験 1 においては、対人不安傾向の高い人と低い人における慢性的に接近可能な関係性スキーマについて語彙判断を用いることでその検討を行った。実験 1 の結果からは、予測とは異なり HSA 群において拒絶語ではなく受容語において文脈との随伴的な関係が見られた。また、LSA 群の人は、拒絶語について文脈との間に予測していなかった随伴的な関係が見られた（総合考察で言及する）。対人不安はあいまいな対人的状況において不安が喚起されやすいという知見から、積極的な拒絶を受けなくても、他者から受容されないという状況はかなりネガティブな状況であると思われる。この観点からすると、対人不安傾向の高い人においては、特に他者からの「受容」ということに関して、文脈との随伴的な関係が形成されているという可能性が考えられる。それが対人場面における脆弱性要因となり、他者との関係の中で不安が喚起されやすくなるというプロセスが存在するのかもしれない。

ただし、これまでの対人不安を含む社会的情動についての理論は他者との関係における拒絶が重視されている面がある。そのため、拒絶というよりもむしろ受容という概念と文脈との間の随伴的な関係が対人不安の生起により関連するという点についてさらなる検討の必要がある。

実験 2

対人不安は他者からの評価が顕著な場面において喚起されるが (Leary & Kowalski, 1995), そのような状況において活性化された関係性スキーマ

の内容を検討することにより、対人不安の特性的側面と状況生起的な側面の両側面と関係性スキーマの関連を検討することとなり、両者の関係についてさらなる理解につながると考えられる。そこで、実験 2 では対人評価場面 (スピーチ課題) および統制場面 (パズル課題) を設定した上、実験 1 と同様の語彙判断課題を行うことで、状況の要因の影響を含め、関係性スキーマと対人不安との関連について検討を行う。

予測としては、対人不安傾向という特性が、対人不安を生起しやすい状況の手がかりに強く反応するのであれば、対人不安傾向の高い人の中でも対人不安を喚起しやすい状況におかれたものが、文脈とその結果 (ターゲット語) の随伴的な関係を最も強く示すと考えられる。ただし、Baldwin & Sinclair (1996) の Study3 では、特定の関係性スキーマを活性化する手続きを行った上で自尊感情と関係性スキーマとの関連を検討し、慢性的な関係性スキーマよりも一時的に活性化された関係性スキーマが語彙判断課題の結果に表れたという結果が得られている。この結果を参考にするのであれば、状況の手がかりによる一時的なスキーマの活性化の影響が特に強く示されることも予測される。

方法

実験参加者

大学生男女 73 名 (男性 21 名, 女性 52 名) が実験に参加した。そのうち 9 名については、実験 1 と同様の採用基準に満たなかったため、分析には使用しなかった。また、3 名は、実験後の面接において、実験でのカバーストーリーに対して重大な疑義を報告したので、分析からは除外した。その結果、分析には 61 名のデータを用いた。各条件への振り分けはランダムに行っており、最終的にスピーチ条件は 31 名、パズル条件は 30 名となった。さらに、相互作用不安尺度 (岡林・生和, 1991) の全項目の合計得点より、中央値 ($Me=20.0$) を算出し、それより高い得点を取った者を高対人不安群 (以下 HSA 群: $M=26.1, SD=3.4$), それ以下の者を低対人不安群 (LSA 群: $M=14.1, SD=3.1$) とした。

実験デザイン

課題条件（対人的評価課題 vs. パズル課題）× 対人不安傾向（HSA vs. LSA）× 文脈語（成功 vs. 失敗）× ターゲット語（受容語 vs. 拒絶語）の4要因の実験デザインであった。課題条件と対人不安傾向は被験者間要因、文脈語とターゲット語は被験者内要因である。

刺激, 装置

実験1と同じものを用いた。

実験材料

相互作用不安尺度 実験1と同じものを用いた。

STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY 日本語版 実験参加者のコミュニケーション中の状態不安を測定するために使用した。この尺度は清水・今栄（1981）によって日本語に翻訳されたものである。本研究では、状態不安尺度のみを使用した。20項目について4段階尺度で評定させた。

操作チェックに関する質問項目 操作チェック項目として、両条件において課題を行うことの確信度、脅威度について9段階尺度で回答を求めた。さらに、各課題への効力感について7段階尺度で回答を求めた。

手続き

対人評価課題条件、パズル課題条件の各条件設定は、以下のように行った。対人評価課題条件には、本実験の目的が、スピーチ能力を測定することを目的としているため、スピーチを行ってもらった上でビデオカメラに録画し、評価者がそれぞれ評価を行うことを告げた。パズル課題条件については、予備実験として本実験で使用するパズルの選定を行うための作業であるとした。これらのカバーストーリーを教示として与えたあとに、各条件での課題を行うことをより信じさせるために、対人評価課題条件では、過去のスピーチの経験、自信のあるスピーチの話題を自由記述で回答

してもらった³。パズル課題条件では、パズルへの興味の程度を7段階尺度で、好きなパズルを自由記述で回答してもらった。その後、両条件とも、スピーチ、パズルを行うまでの間に挟む課題として語彙判断課題を行ってもらった。課題を行う理由については、スピーチ条件はスピーチ内容を前もって考えさせないため、パズル課題は疲労状況を揃えるためという説明を各条件で行った。課題の終了後、操作チェックの質問項目、修正版対人不安感尺度に回答してもらった。それらが完成した時点で、ディブリーフィングを行い、謝礼をして実験を終了とした。実験の所要時間は約30分であった。

結果および考察

予備分析

まず、操作チェックとして設定した質問項目についての分析により、実験操作の有効性について検討を行った。各指標の結果はTable1に示した。

課題に対する効力感、課題が行われることへの確信度について、課題条件×対人不安傾向の2要因の分散分析を行った。その結果、主効果、交互作用ともに有意な効果は見られなかった。また、確信度について実験条件ごとに9段階尺度の midpoint の比較としてt検定を行ったが、両条件とも有意に midpoint よりも高いという結果が得られた（対人評価課題条件： $M=8.3, SD=1.0$ ；パズル課題条件： $M=7.8, SD=1.8$ ）。

両条件における課題の脅威度についての分析の結果、課題条件の主効果のみ有意であり（ $F(1, 57)=11.0, p<.01$ ）、パズル課題条件に比べ、対人評価課題条件は実験参加者にとってより脅威をもたらす課題であることが示された。

最後に、教示が与え終えた時点で測定した実験

Table 1 各群・条件の操作チェック測定

従属測定	対人評価課題条件		パズル課題条件	
	LSA 群	HSA 群	LSA 群	HSA 群
効力感	2.8 (1.5)	2.6 (1.3)	2.9 (1.1)	3.3 (1.1)
課題の確信度	8.4 (1.0)	8.2 (1.1)	7.6 (2.1)	8.0 (1.4)
課題の脅威度	5.9 (2.5)	6.6 (1.2)	4.3 (2.3)	4.7 (2.1)
状態不安	47.9 (11.8)	53.4 (8.7)	39.4 (5.5)	43.5 (7.2)

注) ()内は標準偏差

参加者の状態不安について検討を行った。その結果、課題条件と対人不安傾向の主効果が有意となった（実験条件： $F(1, 57)=18.1, p<.01$ ；対人不安傾向： $F(1, 57)=5.1, p<.05$ ）。対人評価課題条件においては、パズル課題条件よりも高い状態不安を実験参加者が経験していることが示された。また、HSA群の人は、LSA群の人に比べて、有意に高い状態不安を経験していた。

次に、語彙判断課題についての分析を行った。まず語彙判断におけるエラー率は、熟語試行48試行において6.5%であり、非熟語試行48試行では2.2%であった。これらのエラー試行は、分析から省かれた。

非熟語への反応時間について、文脈、課題条件、および対人不安傾向を要因とした3要因の分散分析を行った。その結果、課題条件と対人不安傾向の交互作用のみ有意となった（ $F(1, 57)=4.1, p<.05$ ）。この交互作用は予測していないものであった。単純主効果の結果は、対人不安傾向とあまり関連しないと思われるパズル課題条件において、対人不安傾向による差があることを示しており、対人不安についての理論的観点からこの結果を解釈することは困難であるため、これ以上の考察は控える。

最後に、中立の文脈刺激を呈示したときのターゲット語への反応時間について検討を行った。ターゲット語、課題条件、および対人不安傾向を要因とした3要因の分散分析を行ったところ、有意な効果はいずれも見られなかった。

主分析

データの分析は誤反応を除き、正答のみを使用した。各群、条件ごとの平均反応時間をTable2に示した。この反応時間について、課題条件、対人

不安傾向、文脈、およびターゲット語を要因とした4要因の分散分析を行った。その結果、対人不安傾向、文脈、ターゲット語の主効果が有意であった（対人不安傾向： $F(1, 57)=4.4, p<.05$ ；文脈： $F(1, 57)=18.5, p<.001$ ；ターゲット語： $F(1, 57)=11.4, p<.01$ ）。HSA群（ $M=781.7, SD=165.8$ ）はLSA群（ $M=874.5, SD=207.1$ ）に比べ、反応時間が短く、成功の文脈における反応（ $M=765.6, SD=146.0$ ）の方が、失敗の文脈における反応（ $M=818.9, SD=192.0$ ）よりも有意に短いことが示された。また、受容語に対する反応（ $M=777.8, SD=164.6$ ）の方が、拒絶語に対する反応（ $M=806.7, SD=179.0$ ）よりも有意に短いことも示された。ターゲット語の主効果については、Baldwin& Sinclair (1996)の実験においても得られており、本研究でも同様の結果が得られたことが示された。

交互作用についてみると、対人不安傾向についてはその他のどの要因との間にも交互作用効果は見られず、実験1の結果と異なり、対人不安傾向、文脈、ターゲット語の3要因の交互作用も有意とならなかった。しかしながら、課題条件、文脈、ターゲット語の3要因の交互作用が有意であった（ $F(1, 57)=5.5, p<.05$, Figure2参照）。この2次の交互作用に対して単純効果の検定を行ったところ、成功の文脈において、実験条件とターゲット語の交互作用が有意であり（ $F(1, 114)=6.3, p<.05$ ）、対人評価課題条件において文脈とターゲット語の交互作用が有意であった（ $F(1, 57)=5.3, p<.05$ ）。これらの交互作用について単純・単純主効果を検討したところ、対人評価課題条件における受容語について、文脈の効果が有意であり（ $F(1, 114)=13.0, p<.001$ ）、成功の文脈（ $M=746.2, SD=120.6$ ）のほうが失敗の文

Table 2 各群・条件の平均反応時間

		対人評価課題条件		パズル課題条件	
		受容	拒絶	受容	拒絶
LSA 群	成功	761.7 (138.6)	842.3 (205.8)	795.2 (126.5)	791.7 (144.8)
	失敗	851.8 (221.0)	867.6 (231.0)	861.6 (211.1)	880.9 (174.1)
HSA 群	成功	732.5 (103.2)	791.3 (147.1)	691.0 (94.6)	706.8 (114.1)
	失敗	799.7 (166.4)	802.1 (181.0)	713.8 (113.3)	759.4 (137.2)

注) 単位は ms, 対人課題評価条件・LSA 群: $n=16$; 対人評価課題条件・HSA 群: $n=15$;
パズル課題条件・LSA 群: $n=15$; パズル課題条件・HSA 群: $n=15$, ()内は標準偏差

脈 ($M=822.3, SD=176.9$) よりも有意に反応時間が短かった。さらに、対人評価課題条件の成功の文脈においてターゲット語の効果が有意であり ($F(1, 114)=14.8, p<.001$)、受容語 ($M=746.5, SD=123.1$) のほうが拒絶語 ($M=815.5, SD=193.4$) よりも反応時間が短いということが示された。

パズル課題条件においては、受容語、拒絶語の両方において文脈の効果が有意であった (受容語: $F(1, 114)=4.2, p<.05$; 拒絶語: $F(1, 114)=10.6, p<.01$)。パズル課題条件においてターゲット語が受容語だった場合、成功の文脈 ($M=746.5, SD=123.1$) の方が失敗の文脈 ($M=792.6, SD=187.6$) よりも反応時間が短く、拒絶語の場合も同様に成功の文脈 ($M=752.1, SD=138.1$) の方が失敗の文脈 ($M=823.8, SD=168.9$) よりも反応時間が短かった。

実験2においては、対人評価課題条件において実験1のHSA条件と同様の結果が得られ、対人不安傾向の効果は見られなかった。これらの結果は、対人不安傾向という特性の効果が状況の実験的操作により見られなくなることを示している。特性×状況という相互作用論的な予測をするのであれば、対人不安傾向の高い人が対人不安を喚起しやすい状況の影響をより強く受けるという3次の交互作用も予測されたが、そのような結果は得られなかった。このように状況的影響が強く示されるという結果は、Baldwin & Sinclair (1996) の研究においても同様のものが得られている。関係性スキーマは個人が一個のスキーマを持っているのではなく、複数所有している (Baldwin, Keelan, Fehr, Enns, & Koh-Rangarajoo, 1996) とい

う知見からすると、対人不安を喚起しやすい状況の手がかりが、対人不安の生起とかかわる関係性スキーマを活性化することで、対人不安傾向の高低に関係なく不安を喚起する可能性を示していると考えられる。

実験3

近年、情報処理過程に言及する際には、自動処理過程、統制処理過程の2過程を区別した2過程モデル (dual-process model) を念頭におくことが多い。このモデルにおいては、人間の情報処理過程において、統制処理過程はより時間がかかり、多くの認知資源を必要とするが、自動処理過程はより短時間に、そして認知資源をあまり消費しないというような対比がなされている。実験1、実験2においては、語彙判断課題における自動処理過程、統制処理過程の2過程を区別することなく実験を実施していた。そこで、実験3においては、刺激の時間間隔であるSOA (stimulus onset asynchrony) を短くすることで、刺激に対する自動処理過程を経た反応を測定する。Baldwin, Baccus, & Fitzsimons (2004) においては、SOAを長くした場合と短くした場合を設定し、自尊感情の高低群で比較した結果、SOAの長短により異なる結果が得られている。特に自尊感情の高い女性群では、SOAの長い (すなわち統制処理による反応と考えられる) 失敗の文脈において成功の文脈よりも受容語に対する反応時間が短いという結果が得られており、統制処理過程において反応を抑制するという可能性が示されている。本研究の実験3は、自動処理過程と統制処理過程の結果を直接比較させるものではないが、自動処理過程と考えられるSOAの設定による結果を検討することで、実験1、2の結果と対比させて考察することが可能となると考えられる。実験1、2においては、成功、失敗の文脈と受容、拒絶との随伴的關係が予測の方向には得られていないが、自動処理過程による反応において見られるかが、実験3の焦点となる。

方法

実験参加者

大学生男女47名 (男性: 11名, 女性: 36名)

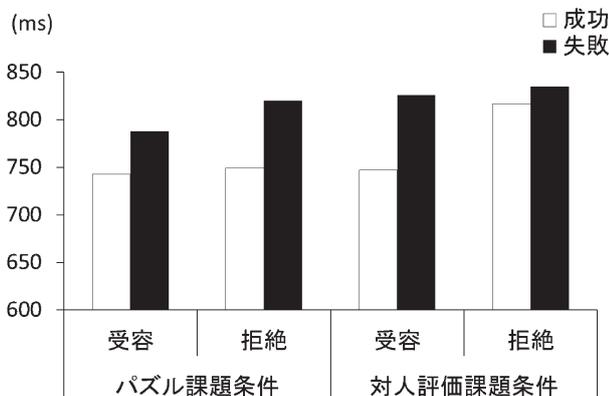


Figure 2 課題条件、文脈、ターゲット語の反応時間における2次の交互作用 (実験2)

が実験に参加した。そのうち5名については、実験1, 2と同様の採用基準に満たなかったため、分析には使用しなかった。その結果、分析に用いたのは42名のデータであった。その42名について相互作用不安尺度(岡林・生和, 1991)の得点より、中央値($Me=23.0$)を算出した。それより高い得点を取った者を、高対人不安傾向群(以下、HSA群: $M=28.4$, $SD=3.7$, $n=17$)、中央値以下の得点を取った者については、低対人不安傾向群(以下、LSA群: $M=19.2$, $SD=4.1$, $n=25$)とした。

実験デザイン

対人不安傾向(HSA vs. LSA) × 文脈語(成功 vs. 失敗) × ターゲット語(受容 vs. 拒絶)の3要因の実験デザインであった。対人不安傾向は被験者間要因、文脈語とターゲット語は被験者内要因である。

刺激、装置

実験1と同じものを用いた。

実験材料

相互作用不安尺度 実験1と同じものを用いた。手続き

実験1と同様であるが、SOAを以下のように変更した。まず凝視点が1000ms呈示され、そのあとで文脈語が250ms呈示された。それから50msの休止の後、判断がなされる熟語が2000ms呈示され、反応時間が計測された。このため、実験3におけるSOAは300msである。操作に慣れるために本試行とは別の刺激を用いた練習試行を行い、その後で本試行を開始した。語彙判断課題の終了後、相互作用不安尺度を完成してもらい、実験を終了した。

結果および考察

予備分析

語彙判断におけるエラー率を算出したが、熟語試行48試行において、エラー率は8.0%であり、非熟語試行48試行におけるエラー率は4.1%であった。これらのエラー試行は、分析から省かれた。

非熟語への反応時間について、文脈語(成功, 中立, 失敗)、および対人不安傾向(HSA群, LSA群)の3 × 2の2要因の分散分析を行った。その結果、有意な効果はいずれも見られなかった。

さらに、中立の文脈刺激を呈示したときの受容語、拒絶語への反応時間について検討を行った。ターゲット語(受容語, 拒絶語)、および対人不安傾向(HSA群, LSA群)の2 × 2の2要因の分散分析を行ったところ、ターゲット語の主効果が有意であり、拒絶語の方が受容語よりも反応時間が長かった。

主分析

データの分析は誤反応を除き、正答のみを使用した。各群、条件ごとの平均反応時間をFigure3に示した。この反応時間について、対人不安傾向(HSA, LSA)、文脈語(成功, 失敗)、ターゲット語(受容語, 拒絶語)を要因とした2 × 2 × 2の3要因の分散分析を行った。文脈語、ターゲット語の主効果および両者の交互作用が有意であった(文脈語: $F(1, 40)=12.9$, $p<.01$; ターゲット語: $F(1, 40)=18.4$, $p<.001$; 文脈語とターゲット語の交互作用: $F(1, 40)=12.4$, $p<.01$)。その他に有意な効果は見られなかった。

実験3では実験1, 2よりもSOAを短く設定し、語彙判断課題を行ったが、結果として、予測されたようなHSA群における文脈と受容、拒絶の随伴的關係は見られなかった。示されたのは、成功の文脈よりも失敗の文脈で反応時間が長く、受容語より拒絶語に対して反応時間が長いという結果である。さらに、受容語については文脈による差がみられないが、拒絶語については成功の文脈より失敗の文脈の方が反応時間が長いという結果も示された。SOAを短く設定したことで、自動処理過程による反応が得られたと考えられるが、自動処理過程においてもHSA群において予測された文脈と受容、拒絶との間の随伴的關係は見られな

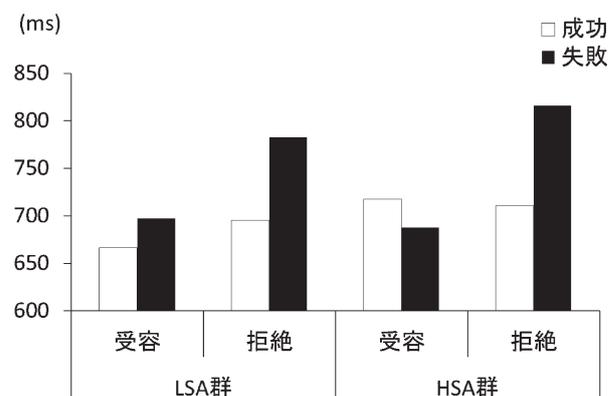


Figure 3 各群・条件の平均反応時間 (実験3)

かった。この点については、総合考察においてすべての実験結果を踏まえて考察することとする。

総合考察

本研究において、関係性スキーマと対人不安の関連について特性、状態の二つの面より実験的な検討を行った。対人不安は他者との関係において関係の切り下げという関係性評価に対する警告信号として概念化されている (Leary & Buckley, 2000)。そこで、関係の切り下げの最たるものである拒絶という概念に対して、特に文脈との随伴的な関係があることという予測がなされた。しかしながら、実験1、実験2、実験3の結果からは、そのような予測は支持されなかった。実験1、実験2において対人不安傾向という特性の高い人において慢性的に接近可能なもの、あるいは対人不安喚起場面において一時的に接近可能になったものの両方で受容語について文脈との随伴的な関係が見られた。このような結果は予測とは異なるものであり、結果は慎重に解釈する必要がある。また、今後の課題において述べるように、本研究とは異なる実験手続きを用いて今後も検討を続けていく必要性を考えさせる結果であった。

ここではまず本研究の3つの実験の結果をあえて積極的に解釈してみる。受容という概念が対人不安との関連においてどのように位置づけられるだろうか。対人不安は他者からの関係評価の結果、関係の切り下げが生じる場合に警告として生起する感情としてとらえられている。そうであれば、拒絶の次元よりも、受容されるのか否かという次元に敏感に反応を示すものであると考えられるかもしれない。対人不安が連動するシステムとして理論的に仮定されているソシオメーターとしての自尊感情は、拒絶が存在する状態よりも受容か拒絶か微妙な部分において変化が大きく、特に受容の減少に敏感に反応を示すという知見もある (Leary, Haupt, Strausser, & Chokel, 1998)。そして、他者からの受容に対して文脈との随伴的な関係がスキーマとして活性化するということは、他者から無条件に受容されるわけではないという点で不安を喚起する要因となりうる。対人不安傾向の高い人においてはそのようなスキーマが慢性的に接近可能であることから、また、対人評価課題条件においては状況手がかりによりそのようなスキーマ

が一時的に活性化することから、対人不安が喚起されることが考えられる。Baldwin & Main (2001) においては、その考察において、受容のスキーマの活性化のほうが心理的な影響が大きいという可能性を指摘している。このような指摘は、本研究の考察と軌を一にするものであると考えられるであろう。さらに、対人不安が極度の高まった社会不安障害の人の判断や解釈のプロセスにおいて、ネガティブバイアスではなく、ポジティブバイアスの欠如が見られるという知見も得られている (例えば、Garner, Mogg, & Bradley, 2006; Hirsch & Clark, 2004; Hirsch & Mathews, 2000)。他者からの受容をポジティブな出来事とするのであれば、対人不安傾向の高い人はある対人場面が受容というポジティブな出来事であったという解釈がしづらいということにつながることも考えられる。これは本論文における他者からの受容が条件づきとなっていることが対人不安の喚起に関連するという観点からも理解可能であるだろう。

ただし、本研究で得られた結果においては、上記の解釈と一致しない点も得られている。実験1のLSA群においては受容語における文脈との随伴的な関係が見られなかったものの、実験2においては、パズル課題条件においても受容語において成功、失敗の文脈の効果が表れていた。パズル課題条件においても多少の評価懸念を感じさせたとも考えられるが、不安喚起に受容と文脈の随伴的な関係が関わっているという解釈には本研究の知見のみでは不足があることは否めない。

2つの情報処理過程という観点

本研究の情報処理における2過程理論を考慮した実験3の結果を含めて考えると、異なる視点から対人不安と関係性スキーマの関係を考えることができる。実験3では、自動処理過程においてはHSA群だけでなく、全体に受容語においては文脈の効果は見られなかったが、拒絶語においては文脈の効果が有意であった。この結果は、実験1の結果と対比させてみると興味深い。実験1におけるLSA群の結果は、実験3の結果と類似していた。つまり、このような結果のパターンは、自動処理過程によるものであると考えられる。一方、HSA群においては、実験1の結果と実験3の結果はむしろ逆のパターンを示していた。つまり、

先述のように受容語について文脈との間の随伴的関係が見られた。このような HSA 群に見られた受容における文脈との随伴的関係は、自動処理過程ではなく統制処理過程において生じている可能性を示している。その場合、HSA 群の人は、失敗の文脈においては受容語の処理を抑制しているとも解釈できる。このような抑制のプロセスは逆に自尊感情の高い人や安定のアタッチメントスタイルを有する人に見られている。自尊感情の高い女性は、統制処理過程において、失敗の文脈における拒絶語の処理を抑制させていたという知見がある (Baldwin et al., 2004)。また、アタッチメントスタイルと拒絶に関連する情報との関連を検討した研究においては、dismissing のアタッチメントスタイルとともに secure のスタイルの人にも拒絶情報を抑制する傾向が見られた (Baldwin & Kay, 2003)。このような HSA 群における失敗の文脈での受容語の処理の抑制の可能性は、統制処理過程の条件との直接の対比がなされていないことから、本研究の結果から結論を導くことは難しいが、対人不安と関係性スキーマの関係を考える上で一つの考察すべき視点を提供していると思われる。

本研究の問題点と今後の課題

以上のように、積極的に解釈を行った場合、いくつか興味深い結果が得られている⁴。ただし、本研究の結果は予測とは大きく異なるものが得られており、上記のような積極的な解釈を行うには、不明な部分や研究実施上の問題点が多く存在する。ここで本研究における問題点と今後の課題を挙げる。

本研究の結果は、条件づきの他者からの受容が対人不安とかわかっているという可能性を示したが、これは対人的な拒絶という概念が対人不安と関係がないということではなく、対人場面においてどのような状態が受容であり、拒絶であるのかという点についての問題であるという可能性も考えられる。例えば、本研究における解釈のように、他者からの受容についての脆弱性が対人不安と関連があると考えるときには、文脈との間に随伴的な関係が構築されているために、受容されるのか否かという点での脆さ（あるいは、「受容されない」可能性）が問題となるわけである。この際、

他者から受容されない状態はその本人にとって拒絶とも感じられるものであるかもしれない。他者から受容されない状態と拒絶された状態はどのような関係にあるのであろうか。これらの概念の関係について精査し、それぞれの状態と対人不安の生起との関係を検討することは、対人不安のより一層の理解につながるとともに、対人的な受容、拒絶という概念化の難しいとされる領域(例えば、Leary, 2005) について考察を深めるための手がかりになるであろう。

実験的手続きの観点から本研究の結果を見ると、本研究は拒絶語よりも受容語、そして失敗の文脈よりも成功の文脈において反応時間が短いという傾向が全体に認められ、本研究の結果は刺激の要因や刺激呈示の方法によって生じたものである可能性も否めない。刺激としては、先述の概念の洗練とともに、漢字2字の熟語ではなくひらがなを用いた場合などによる結果の検討が求められるであろう。また、本研究の実験手続きにおいては、刺激語の選定における問題があると思われる。本研究における刺激の選定法は、受容、拒絶という言葉から、シソーラスを用いて同様の意味を示すものを選定した。そのため、それぞれの語句の長さ（2字の熟語という点では統一しているが）、熟知度といった点については、あまり考慮がなされていない。このような要因が剰余変数となる可能性があるのか否かについての検討が必要である。

刺激呈示の方法としては、本研究においては SOA の違いによる検討は行ったものの、情報処理過程を検討するためには、これ以外にも多くの手法が存在する。例えば、本研究においては文脈刺激を全て閾上の呈示時間で呈示を行った。このような刺激呈示が本研究の結果に影響を与えた可能性も大いに考えられる。今後、文脈刺激の呈示を閾下となる呈示時間で呈示することで、結果がどのようになるか検討する必要があるだろう。

上記のように検討すべき課題が多く存在し、本節の序盤で行ったような積極的な解釈は、本研究の知見のみではあくまで可能性としてのものではない。異なる実験手続きを用いた結果の比較や概念の洗練などにより対人不安と関わる関係性スキーマの内容についてさらにより多くの検討を行う必要がある。関係性スキーマという概念は自

己や対人関係を考える上で非常に興味深いものであり、多様な実験手続きによる検討を踏まえた上で対人不安との関連について考察することは、対人不安理解のための大きな一助となると期待される。

<注>

- 1 本研究は日本心理学会第68回大会および日本心理学会第70回大会において発表されたものに加筆・修正を加えたものである。
- 2 判断の時間が2000ms以上かかった場合は、欠損値として記録を行った。そのように処理を行うことで極端な値が出ることを抑制できるため、反応時間を変換するのと同様の結果となると考えられている。変換を行わないことで直接反応時間を分析することができることもあり、本研究ではこのアプローチを採用した。
- 3 実験参加者にはスピーチする際にここで回答されたテーマが与えられるかどうかは不明であると伝えた。
- 4 さらに言えば、実験2において示されたように、対人不安を喚起するような状況要因が実際に関係性スキーマの活性化に影響を及ぼすという結果も注目される。Baldwin & Sinclair (1996) などにおいては、直接的に特定の関係性スキーマを活性化する方法を実施しているが、本研究のように直接関係性スキーマの活性化を促すのではなく、場面設定だけで特定の関係性スキーマ（本研究で言えば、実験1のHSA群と同様のもの）が活性化されたという知見が得られたことは、関係性スキーマの影響を考える上で興味深い。

<文献>

- Baldwin, M. W. (1992). Relational schemas and the processing of social information. *Psychological Bulletin*, *112*, 461-484.
- Baldwin, M. W. (1994). Primed relational schemas as a source of self-evaluative reactions. *Journal of Social and Clinical Psychology*, *13*, 380-403.
- Baldwin, M. W., Baccus, J., & Fitzsimons, G. M. (2004). Gender, self-esteem, and the automatic processing of if-then contingencies. *Self & Identity*, *3*, 81-94.
- Baldwin, M. W., Carrell, S. E., & Lopez, D. F. (1990). Priming relationship schemas: My advisor and the pope are watching me from the back of my mind. *Journal of Experimental Social Psychology*, *26*, 435-454.
- Baldwin, M. W., Fehr, B., Keedian, E., Seidel, M., & Thomson, D. W. (1993). An exploration of the relational schemata underlying attachment styles: Self-report and lexical decision approaches. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *19*, 746-754.
- Baldwin, M. W. & Fergusson, P. (2001). Relational schemas: The activation of interpersonal knowledge structures in social anxiety. In R. Crozier & L. Alden (Eds.), *The International Handbook of Social Anxiety*. Sussex, England: John Wiley & Sons. pp.235-257.
- Baldwin, M. W. & Holmes, J. G. (1987). Salient private audiences and awareness of the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, *52*, 1087-1098.
- Baldwin, M. W. & Kay, A. C. (2003). Adult attachment and the inhibition of rejection. *Journal of Social and Clinical Psychology*, *22*, 275-293.
- Baldwin, M. W., Keelan, P. R., Fehr, B., Enns, V., & Koh-Rangarajoo, E. (1996). Social-cognitive conceptualization of attachment working models: Availability and accessibility effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, *71*, 94-109.
- Baldwin, M. W. & Main, K. J. (2001). Social anxiety and the cued activation of relational knowledge. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *27*, 1637-1647.
- Baldwin, M. W. & Sinclair, L. (1996). Self-esteem and "If...Then" contingencies of interpersonal acceptance. *Journal of Personality and Social Psychology*, *71*, 1130-1141.
- Garner, M., Mogg, K., & Bradley, B. P. (2006). Fear-relevant selective associations and social anxiety: Absence of a positive bias. *Behaviour Research and Therapy*, *44*, 201-217.
- 五島史子・太田信夫 (2001). 漢字二字熟語における感情価の調査 筑波大学心理学研究, *23*, 45-52.
- Hirsch, C. R. & Clark, D. M. (2004). Information-processing bias in social phobia. *Clinical Psychology Review*, *24*, 799-825.
- Hirsch, C. R. & Mathews, A. (2000). Interpretative inferences when reading about emotional events. *Journal of Abnormal Psychology*, *109*, 705-712.
- Leary, M. R. (1983). Social anxiousness: The construct and its measurement. *Journal of Personality Assessment*, *47*, 66-75.
- Leary, M. R. (2005). Varieties of interpersonal rejection. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & B. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York: Cambridge University Press. pp.35-52.
- Leary, M. R. & Buckley, K. (2000). Social anxiety as an early warning system: A refinement and extension of the self-presentational theory of social anxiety. In S. G. Hofman & P. M. DiBartolo (Eds.), *Social phobia and social anxiety: An integration*. New York: Allyn & Bacon. pp. 321-334.
- Leary, M. R., Haupt, A. L., Strausser, K. S., & Chokel, J. T. (1998). Calibrating the Sociometer: The relationship between interpersonal appraisals and state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*, 1290-1299.
- Leary, M. R. & Kowalski, R. M. (1995). *Social anxiety*. New York: Guilford.
- Markus, H. (1977). Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, *35*, 63-78.
- 岡林尚子・生和秀敏 (1991). 対人不安感尺度の信頼性と妥当性に関する一研究 広島大学総合科学部紀要Ⅲ,

15, 1-9.

Schlenker, B. R. & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, **92**, 641-669.

清水秀美・今栄国晴 (1981). STATE-TRAIT INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, **29**, 348-353.

Appendix 語彙判断課題で使用した文脈語とターゲット語

種類	分類	熟語
文脈語	成功語	成功, 達成, 実現, 優秀, 有能, 完全, 優越, 勝利, 成就, 成立, 出世, 有望, 結実, 完成, 敏腕, 抜群
	失敗語	失敗, 敗北, 無能, 過失, 失策, 落第, 挫折, 無力, 屈服, 粗相, 失態, 破局, 降参, 不覚, 裏目, 非力
	中立語	来社, 発生, 建設, 講演, 選択, 転換, 録音, 示唆, 意味, 持参, 帰宅, 求職, 加盟, 貿易, 準備, 位置
ターゲット語	受容語	受容, 承認, 包容, 容認, 許容, 尊重, 好意, 賞賛, 信頼, 親密, 関心, 尊敬, 歓迎, 包含, 連帯, 所属, 結束, 団結, 了解, 親愛, 親身, 密接, 友好, 愛着
	拒絶語	拒絶, 拒否, 排除, 嫌悪, 憎悪, 疎外, 回避, 断絶, 追放, 除外, 難色, 却下, 解雇, 馬鹿, 無視, 不和, 絶交, 反目, 反感, 勘当, 非難, 葛藤, 確執, 叱責